九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

文心雕龍（五）

目加田，誠

https://doi.org/10.15017/2332913

出版情報：文學研究. 47, pp.1-30, 1953-12-25. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

文心雕龍（五）

目加田誠

先に四回に亘つて文心雕龍の訳と解説とを掲載したが、何分このやうな特殊なものは誰の役にも立たぬであらうと、それきり中止していたところ、思ひかけず三四の未知の方からまで、その後どうしたかと問ひ合せがあつたのに力を得て、再びあとを続けて時々雑誌の埋ぐさにさせて戴かうと思ふ。先に掲載した分を改めて見ると、誤りやまづいことばが可成り目立ち、気になるのであるが、いつれ機を得てすつかり訳し改めて、ずつと読み易いものにしたいと思ふ。

楽府　第七

楽府とは所謂声[一]を永く引き、調子をとゝのへて歌ふものである。かの鈞天[二]の広楽とか九奏の万舞とかは、之はもう天帝の楽舞といはれるものであり、葛天[三]氏の八曲に至つて始めて三皇五帝の世の製作と伝へられ、さては黄帝[四]の咸池、帝嚳の五英以下の云ひ伝への如きは亦今日之を何とも論じ得ぬ。塗山[五]氏の女が山の陽（みなみ）に禹を候（ま）ちこがれて歌つた歌から南音は始まり有娀の二女が飛燕を見て謡つてから北音は起り、夏后[七]氏孔甲が東陽に歎じて（破斧の歌を作つて）から東音はおこり、殷の河亶甲[八]が西河に移つて故宅を恋ふて（作つた歌）から西音は興つたといふ。音声の推移はまことに一概にはつくされぬ。民間男女の謳吟する民謡が採詩の役人によつて採り上げられ、盲の音楽師によつて音律にのせられゝば、その地方の民の志気のさまざまは、自づと絲竹金石の音にあらはれた。されば師曠[九]は南音の振はざるをきいて楚国の盛衰を覘ひ、季札[十]は

楽を観て各国興発のきざしを鑒みた。まことに精緻の至りである。

詩楽分れてより、詩は士大夫のすさびとなつたが、その一方やはり音楽に奏する歌もある。漢の武帝は朝廷宗廟に奏する音楽を整理し、又各国の歌謡を採集して、之を掌る役所を設けて楽府と名付けた。之がやがてそこに集つた歌謡をさして楽府と称し、又後世も音楽に合せ節づけてうたふ歌をさして広く楽府といふに至つたのである。

この第一段は、楽府とは所謂詩と異り、声律をとゝのへて歌ふものであり、その由る所は遠く久しいものであるが、古の伝説については今日論ずべくもない。要するに歌は各地に起り、それ〳〵に異つた風気がそこに現れるので、所謂八風が八音に現れ、音楽をきけば各地の風気が察せられる。師曠季札の物語はその精微の極致を示してゐるものだといふことである。

(一) 舜典に、声永きに依り、律、声を和すとあり。
(二) 史記趙世家、簡子の夢に現れたもの。
(三) 呂氏春秋古楽篇に出づ。
(四) 白虎通論帝王礼楽。
(五) (六) (七) (八) 呂氏春秋音初篇。
(九) 襄公十八年左伝。
(十) 同廿九年左伝。

凡そ音楽は人の心情にもとづくものであるから、その響は人の肌髄に泌み透る。されば先生はこゝに慎み、つとめて中和を失ふことを禦いだ。その世子に訓へるには必ず九徳を歌はせたのである。故に情志は音律をうごかし、政化はまたよく八方の風気を動かした。

(一) 漢書礼楽志に、周礼に国子を教ふるに朝夕九徳（水火金木土穀を六府といひ、正徳利用厚生を三事と謂ひ、六府三事を九功といひ、九功の徳を歌ふを九歌と謂ふ）を歌ひ、六詩を誦し、六舞を習ひ、五声八音の和を習はせたとあり。舜典に、帝曰、夔、汝に命じて楽を典らしむ。胄子ををしへよとある。音楽を以て子弟を教へることは古の重要な情操教育であつた。

(二) 原文、故能情感七始とあり。七始とは天地人と四時。律呂に於て黄鐘・林鐘・太簇が天・地・人に応じ、姑洗・蕤賓・南呂・応鐘が四時に応ずるとされる。

しかるに雅正の音楽が次第に衰へては、淫靡な音楽が盛に沸き起つた。秦の始皇は楽経をも燔き滅したが、漢の初に復び之を紹ぎ、音楽家の制氏は世々（大楽官の職に在つて）雅楽の鏗鏘たる音を正し、叔孫通は（宗廟の楽を定めて）その典雅な礼式を定めた。是に於て高祖の時には武徳の舞が興り、孝文帝の時には四時の舞が作られた。之らは古楽に模擬したものではあつたが、而も大抵秦代の旧制を踏襲したもので、古楽の中和を得たる響は已に一度去つて復た聞ゆるところが無かつた。

漢の武帝が祀りを崇ぶに及んで、始めて楽府の官を立て、北は趙、代、東南は齊、楚の国々の音楽を総収し、李延年が協律都尉となつて、新らしく声調を変へて、細美の曲を製作し、朱買臣や司馬相如が楚辞の形を用ゐて歌を作つた。乃で桂華の曲（安世房中歌第十二）、赤雁の歌（太始三年東海に行幸して赤雁を獲へて作る。郊祀歌象載歌十八）などの諸篇は、纎麗ではあるが典雅さは無かつた。河間の献王は雅楽を朝廷に薦めたけれども、朝廷では之を殆ど用ひず、乃でかの汲黯が、（武帝が天馬を得て製した）太一天馬の曲を譏るやうなことも生じたのだ。

(一) 史記楽書、漢の武帝が神馬を得て、太一天馬の歌を作つた。それは楚歌の調子のものだつた。汲黯は、王者の楽は上は祖宗に承け下は兆民を化すべきものであるのに、馬を得たからとて詩を作り、之を宗廟に奏するとはその道に外れてゐると諫めた。

宣帝の雅頌に至つては、その詩は頗る鹿鳴（詩経小雅）の詩に倣つた。

㈠ 当時天下殷富に、屢々めでたき瑞兆あり、帝は好んで歌詩を作り、雅頌を製した。

が、元帝・成帝の世になると、又も淫楽が次第にひろがつた。凡そ雅正の音楽は俗耳に入り難く、典雅の音の世に行はれ難きこと此の如くである。

音楽は人心の自然から生ずるものであれば、民の心情はこゝに現れる。人の心正しければ正しき音楽がおこり、人の心けはしければけはしき音楽となる。民の心の平和なるも険しきも、皆その政治による。八方の音楽をきいて政化の参考に資する所以である。又音楽は人の感覚を通して心に泌みこむものであれば、之によつて人の心を正しきに導くのは為政者のつとめでもある。乃で先王は音楽をまことに慎しみ、重んじた。その後、雅楽が次第に衰へ、秦の世に楽経が亡び（楽経といふものが本来存在したか否かはこゝに論ぜず）、漢になつて雅楽が再興したとはいへ、もはや古楽の真の姿ではなかつた。雅楽の世に行はれ難いことを述べる。

後漢の郊廟の礼には新に雅楽の辞を製作し、その辞句は典麗ではあつたが、而もその音律はもはや古のものではなかつた。魏の三祖(一)に至つては、俊邁の気象、華麗な才藻を以て、従来の歌調を或は分割(二)して歌を製したが、その音節は繊美平弱であつた。曹操の苦寒行(三)、文帝の燕歌行などの諸篇を観ると、或は酣宴をうたつてその志、淫蕩を出でず、或は羈旅征戍を傷んでその辞、哀思を離れず、何れも漢の房中曲に属する平調・清調・瑟調の正しい調子を伝へてゐるとはいへ、実は古楽の正しさから見れば、已に典雅さを失つた鄙俗なものであつた。

㈠ 魏の武帝（曹操）・文帝（丕）・明帝（叡）。

㈡ 宋書礼楽志によれば、相和曲は漢時の歌。もと一部であつたものを明帝が分つて二つと為すとあり。

㈢ 原文北上衆引、秋風列篇とあり。曹操の苦寒行「北上太行山云々」及び文帝の燕歌行「秋風蕭殺天気凉云々」の歌を指す。以上後漢から魏に至る楽府。魏の曹氏父子は古楽府によつて新らしい歌を作り、詩に新生面を開いた。之が彼らの文学史上の大きな功績であつた。けれどもそれは已に古楽の雅正さを失つたものであつたとする。

晉の世になつて傅玄(一)は音律に明るく、雅歌を創定して宗廟に詠じ、張華(二)も新らしい歌を作つて朝廷に舞はれた。のみならず杜夔は鐘律を調へてよく典雅の音を奏し、荀勗(四)は尚その音に不調和のところがあると言つて楽器を作り直したが、その音節が少し急であつたので、阮咸は更にそれが正音を外れてゐることを譏つた。後に人が地を堀つて古の銅尺を発見し、荀勗の作つた律尺とくらべて言ると果して古今の尺の長短があることを知つた。楽律の調和の精妙さ、もとより楽の体と楽の心が表裏互に資け合つてゐるのである。

㈠ 傅玄は音律に詳しく、郊祀明堂の楽歌、四廂楽歌、鼓吹曲、舞歌その他の雅歌を創作した。

㈡ 張華も亦四廂楽歌、凱歌その他を新に作つた。

㈢ 魏志本伝に杜夔が先代の古楽を復興したことがのべられてゐる。

㈣ 晉書律歴志に曰ふ、武帝の泰始九年、荀勗が古尺を制定してそれによつて新に楽器の寸法を調へた。時人はその精密さを讃へたが、たゞ阮咸はその声が高すぎるのを譏り、声音が高すぎると響きが感傷的になり、亡国の音になつて、徳正至和の音でなくなる。之は必ず古と今との律尺の長短の差の致す所であらうと云つたが、咸の死後、地中から古の銅尺が出現し、荀勗の用ひた尺よりも四分長かつたので、人は皆阮咸の精妙さに感服したといふ。

かく考へると、実に詩は楽の心であり、声は楽の体である。楽の体が声に在るからは、楽師はつとめて楽器を調へ、楽の心が詩に在るからは、君子は宜しくその文辞を正すべきである。(詩経晉風蟋蟀の)「楽を好めど荒むなし」の歌は、晉国に古の帝堯陶唐氏の節倹の遺風があり、その遠き慮りあることを讃へられる所以であり、(同じく鄭風溱洧の男女が)「伊

れ其れ相謔る」の歌は、鄭国がまつ先きに亡んだ所以でもある。されば昔呉の季札が魯国に来て周の音楽を参観した際に只その音声を聴いただけでなく、その文辞をも観察して批評したのであつた。

襄公廿九年左伝、呉の季札が魯に来て、魯に伝はる周の音楽を観る。「好楽無荒」は晉風蟋蟀の詩で、季札は之をきいて「晉は陶唐氏の遺風あり、その憂ふること遠し」といつた。又「伊其相謔」は鄭風溱洧の、男女が水辺で相戯れる歌で、季札は之をきいて、「鄭国は先づ亡びるであらう」と評した。楽は音と辞が相俟つて出来るもの、その音を正すのは音楽家の任務であるが、その文辞を正すことこそ士君子のつとめである。もとより著者はこの書に於て文辞文章を論ずるものであるから、楽府についても、こゝに問題とするのは主としてその文辞の方面たることは云ふ迄もない。

かの婉孌たる豔歌、恋する人と訣絶する怨詩のごとき、已に淫蕩な文辞が曲に入つてゐる以上、之に合せる音楽にどうして正しい響が生じよう。然も之が俗耳によろこばれて流行し、もつぱら新異を競ふことゝなる。温恭なる風雅の歌詠には必ず睡気を催し、刺戟の強い新奇な辞には膝をたゝいて雀躍する。かくして歌辞も音楽も倶に俗に陥ること、此よりして始まる。凡そ楽の辞を詩と曰ひ、詩の声を歌と曰ふ。その辞を歌ふのに、辞が繁多であれば音調を節し難い。故に魏の陳思王（曹植）は、李延年が常によく古辞を増減して音楽に協へたことをほめてゐるが、辞の繁多なものはぜひ之を減ぜねばならぬ。楽の辞は明かに簡約を貴ぶのである。漢の高祖の大風の歌、孝武帝の来遅の歌などは皆小児ですらも之を節づけて歌つて協はぬものは無かつた。曹植、陸機には皆佳作があるけれども、それらは決して音楽師に歌はせようとしたものではない。従つて彼らの楽府といふのは已に音楽から分離したものであり、之を調子外れと評するのは尚思はざるものである。古く黄帝岐伯以来有りといはれる鼓吹曲で、漢の鐃歌[一]・挽歌[二]の類は、軍楽、葬曲の相違こそあれ、皆楽府に入る。

魏の繆襲(三)の作つたものも亦楽府にかぞへられるものがある。昔劉向も文章を分類したとき、詩と歌とを区別したことであるから、今自分も一応こゝに楽府篇を設けて、楽府と詩との夫々の領域を示したのである。

(一) 鐃歌は軍楽。今漢の鐃歌十八曲が残つてゐる。

(二) 挽歌は漢初自殺した田横の門人が、彼の死を哀んで作つたといはれる薤露蒿里の曲。武帝の時、李延年が之を分けて二曲とし、薤露は王公貴人を送る曲、蒿里は士大夫庶人を送る曲とした。柩を挽く者に歌はせるので挽歌といふ。

(三) 繆襲所致。唐写本には繆朱所改に作る。鈴木博士校勘記に曰、繆朱は繆襲朱生を指して言ふかと。朱生は宋書楽志に見える楽府を改訂した人の一人。

贊に曰く八音文を擒べ、辞を樹てゝ体と為す。垧野に謳吟し、雲陛に金石す。韶響追ひ難く、鄭声啓き易し。豈惟楽を観るのみならんや。こゝに於て礼を識る。

文辞を設け、金石絲竹匏土革木の八音もて之をのべ、朝廷に奏し、郊野に吟ふ。既に古楽は追ひ難く、俗楽のみ起り易い。たゞ音楽を観るばかりでなく、そこにその国の礼を鑒識すべきものである。

この篇、楽府といふものは、詩と音楽との二要素から成る芸術であることから、詩辞が正しくないと楽も自づと雅正ならず、両者相表裏する中にも詩辞を正すことこそ文芸の士のつとめであることを云ふ。但し魏以来の作者の作つた楽府は、已に音楽から分離した詩の一体となつてゐるのである。

詮賦第八

詩に六義(一)といふことが云はれ、その第二を賦といふ。賦とは鋪陳の意味であり、文采(二)を擒べ鋪き、事物を象り、情志を写

すことである。昔邵公(一)の言に、公卿は詩を献じ、師は王政の得失を箴刺し、瞍(めくら)は賦すと云つた。

(一) 毛詩大序。詩有六義焉。一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌。

(二) 紀昀評に、鋪采摛文は賦の体を尽し、体物写志は賦の旨を尽す、とあり。

(三) 国語周語。邵公曰。「故に天子政を聴くに、公卿より列士に至るまで詩を献じ、瞽は曲を献じ、史は書を献じ、師は箴し（師とは少師。箴すとは王政の缺陷を箴刺して得失を正す）、瞍は賦し（瞍は眸子無きもの。賦すとは公卿列子の献じた詩を賦する）、矇は誦し（矇とは眸子有れど見えぬもの。周礼に矇は弦歌諷誦をつかさどると。）、百工は諫め、庶人伝語し、近臣規を尽し、親戚補察し、瞽史教誨し、耆艾之を修めしめ、而る後、王こゝに斟酌す」とあり。黄本原文に「師箴賦」に作る。唐写本箴下に瞽字あり。御覧所引亦同じ。恐らく黄本は脱字であらう。紀昀は国語によつて箴の下の脱字は瞍の字だらうといつてゐる。今之に従ふ。

伝にいふ「高きに登つて能く賦してこそ大夫たることが出来る」と。

詩、定之方中毛伝に「故に邦を建てゝは能く亀に命じ、田(かり)には能く命を施し、器を作つては能く銘し、使しては能く命を造(なた)し、高きに升つては能く賦し、師旅には能く誓ひ、山川には能く説き、喪紀には能く誄し、祭祀には能く語る、君子此の九者を能くして、徳音有りと謂ふ可く、以て大夫為るべし」と。登高能賦を大夫たる資格の一つとしてゐる。こゝで賦の語義が二つとなる。一つは詩の六義の賦即ち鋪陳の意であり、今一つは国語や毛伝の、詩を歌はずして誦する意味である。

かくて詩序の賦は比興などと共に同じく六義の一つであり、毛伝国語の賦は箴や銘や誓や誄などゝとは別の一つの体であるが、畢竟帰する所は一途であり、実に両者は相関聯するものである。劉向は「賦とは歌はずして頌するものである」ことを明かにし、（漢書芸文志引）、班固は賦は古詩の流だといつた。（両都賦序）。

何故にこの両者が一途に帰するか。要するに賦は詩の六義の一つだから「古詩の流」といつたが、六義の賦とは本来詩

の表現様式の一つであり、鋪陳の意味である。そこから、或る事物を対象に、たとへば「高きに登つて眺望する風景やものゝ形状をのべてゆく」（毛伝正義）場合に歌はずして誦する、一つの文学様式が発展して行つたのである。范文瀾氏などは賦には歌ふのでもなく、只口づさむのでもなく、一種の声調があつたのではないか。屈原や荀子は、かの瞍が賦したといふその声調を取つて辞を作つたのではないかといつてゐるが注意す可きである。

かの左伝の、鄭の荘公が大隧を賦し、士蔿が狐裘を賦したといふ如き、その構成は短い韻文であり、その詞は自分が作つたもので賦の体に合つてゐるとはいへ、まだ充分明かに発展したものではない。

左伝隠公元年鄭の荘公詩を賦して曰く、

大隧之中。其樂也融々。
大隧之外。其樂也洩々。

（正義云、賦詩とは自ら詩を作りしを謂ふ也と。人の作つた詩を誦したのではなく、自分の思ひをのべたものではあるが、まだ後世の賦といふ文学の形にまで発達してゐるものではない。）

同僖公五年、士蔿退いて賦して曰く、

狐裘尨茸。一国三公。吾誰適從。

（杜注此れ士蔿自ら作りし詩也）

屈原が離騒を作るに至つて始めてその声容が広大になつたのである。してみると賦といふものは、その名を詩経の詩人に受け（六義の一つなる故）、その世界を楚辞に於て開拓したものである。こゝに於て荀子の礼の賦、智の賦、宋玉の風の賦、

釣の賦などが出て、こゝに賦といふ名号が与へられ、詩とは境界を画したので、始めは六義の一つに附け加へられた小国が、やがて蔚然たる大国を成すに至つたのだ。かくて遂にその篇の首に主客の問答から引きおこし、その形容を極めて文采を用ひつくすものとなつた。之がまづ賦といふものゝ詩から別れる初め、又賦と命名される始めである

事実賦の形式は楚辞に起るといつて良いであらう。只屈原の楚辞は彼の高邁なる情志を訴へるために、多くの禽獣草木をかりて偉大な文采をしいたのに対し、それ以後の賦の作者は比興象徴の精神を離れて、只対象とするところを、文辞を尽して描写し、むしろそれに関するある限りの概念を美しいことばで並べ立てるのが漢の賦であつて、それが己れの情志を訴へる騒体の文学と区別される。そしてその賦は、大体主客の問答にはじまり、客が主に向つてたとへば己れの国の苑囿の美を誇る。主がそれに対して更に劣らず己れの国の苑囿を誇る。時に第三者が現れて更にその上に出る、といつた風の一種対話の形式を用ひて、そこに文辞の雄偉壮麗を誇るわけである。（己に楚辞にも対話形式が見えてゐるが）。

且つその宮殿、禁苑、天子の狩猟などの壮麗さをのべ立てるところに凡そ驚く可くおびたゞしい文字を使用して百科辞典的な智識を誇示し、且つその文字は屢々偏旁を同うするものを積み重ね、句末に韻をふんで諷誦に供へると共に、視覚に訴へる美しさをも持つてゐたらしい。恐らく漢代に於ける文学に対する魅力といふものが作用してゐるであらう。それには、漢字の性質からしていくらでも形声文字が作り出せる所から、あんなに仰山な字が積まれるのだし、現に漢賦の作者には辞典の作者があることも併せ考へていゝであらう。

秦の世は文采乏しく、ほゞ雑賦があるばかりだ。

漢書芸文志に「秦時雑賦九篇」とあり。

漢初の作者も、只従来の風に従つて作つてゐたが、陸賈が出て先づその端を試み、賈誼がその緒を振ひ、彼らがはじめとなつて枚乗・司馬相如がその風をひろめ、王褒・揚雄はさらにその勢を騁せ、枚皐・東方朔以下はあらゆる物を対象として描き尽し、宣帝の時已に賦の製作は繁多であつたといはれ、成帝の世に之を校閲したが、その時朝廷に進められた賦は実に千有余首あつたといふ。その源流を討ねれば、実に楚辞に興つて漢代に盛になつたのである。

ところで京都・宮殿・苑囿・田猟・それに或は行旅を述べ、志を叙するものは、いづれもその扱ふ題目が大きく、趣旨も広大を尚ぶので、先づ序にはじまり、終りに全体を総べる「乱」で結ぶ。序はそれによつて言説を立てゝ、首に当つて主題を引き出し、乱はそれによつて全篇を理め、互に相俟つて文の趣旨を一貫させてゐる。按ずるに詩経商頌「那」の最後の章を閔馬父は乱と称してゐる。されば殷人が頌の終りに乱をなし、楚人が賦の最後に乱を以て全篇を整へるのも、共に大制作の領域であり、典雅な文章の枢要である。

(一) 述行序志。黄註、述行は北征の賦、東征の賦の類。序思は幽通の賦、思玄の賦の類。

(二) 国語魯語下「閔馬父曰く、昔正考叔商の名頌十二篇を周の大師に校し、那を以て首を為す。それ之が乱を輯して曰く、自古在昔。先民有作。温恭朝夕。執事有格。」とあり。その韋注に「輯は成也。凡そ篇章を作り、篇義既に成り、その大要を撮して乱辞を為す云々。」

楚辞王逸注にも、乱は理也。詞理を発理し、その要を総撮する所以也。といふ。文采を発揮しつくしたあとで、全篇の趣旨を一言で総括するものである。

さて又草木禽獣の世界、諸物雑類を題として描くに至つては、興に触れて情をはせ、変化に応じて会心の所を取り、その形容を模写しては言葉は纖密をつとめ、その事義を形象しては、道理がそこから離れないことを貴ぶ。之は即ち小品の分

野であり、奇巧を用ふる要点である。

以上漢賦の大作は序あり乱あり、以て全篇を統轄する。之に対して詠物の小品は興会を主とし、纎密にしてよく条理を得てゐることがその巧みなる所以となること。

かの荀況の賦が隠語を用ひ乍ら、事義自ら備はり、宋玉の賦が誇張多くて実に淫麗の風を始め、枚乗の兎園の賦が要をとらへて新をあつめ、司馬相如の上林の賦が、物類おびたゞしく並べつくして見事であり、賈誼の鵩鳥の賦がよく情理を明かにし、王褒の洞簫の賦が声容に変化をつくし、班固の両都の賦が絢明かで典雅豊贍に、張衡の二京の賦が颯爽として宏大富有なる、揚雄の甘泉の賦が深偉の風を構へ、延寿の霊光殿の賦がさながら飛動の勢ある、凡そ此の十家を観るに、皆辞賦の英傑である。降つて魏の王粲の賦が纎密で、発端が必ず遵勁であり、徐幹が博学通識で、往々壮んなる文采を現し、左思・潘岳が大作に成功し、陸機・成公綏が時調に成績を挙げ、郭璞が綺巧あつて縟采情理余り有る、袁彦伯がよく梗概をつかんで而も情緒つきざる、之らは亦魏晉の賦の首たるものである。

以上漢より魏晉に至る賦の名家を列挙。

凡そかの「高きに登つて能く賦す云々」といふ趣旨を考へて見るのに、蓋し物を見て情を興すのであつて、情は物によつて興される故にその主旨は必ず（対象を正しくとらへて）明暢雅正でなければならず、物は情によつて観られ描かれる故に、その詞は必ず（情を含んで）巧麗でなければならぬ。麗はしい詞と正しい主旨が共にかゞやき合つて、恰も絲を組み機を織るに朱紫をとり〳〵にし、絵画に玄黄の色を著けるやうに、文は新（唐写本作雑。）にして質実を失はず、色は雑はるも本を（本一作儀。唐写本作義。）失はぬといふ。これが賦を成立させる上の大体である。然るに末を逐ふ輩は、その根本を蔑棄

する。されば千篇の賦を読んでも、愈々その大切なる点が何処に存するかに惑ふ。そして遂に徒らに華繁くして枝を損ひ膏腹足りて骨を害するやうになつて、風軌勧戒に何ら益する所なきに至る。此れ即ち揚雄がその若き日に賦を作つたことを、雕蟲篆刻童子のわざであつたと後悔し、うすぎぬ織る女工の巧みに等しとの誚りをのこした所以である。

賦に於ても必ずその義正して、その詞麗しく、麗辞雅義相かゞやき、文質相俟つべきこと亦同じ。逐末の輩が徒らに華辞を繁くして、体要を失ふことを嘆じた。

贊に曰く、賦は詩より出で、岐を分ち派を異にす。（唐写本作異流分派）物を写し貌を図くこと、蔚として彫画に似たり。抑滞必ず揚り、言曠（黄本作庸。唐写本作曠。斯波博士文心雕童范注補正云、庸疑当作窮。文賦曰、言窮者無隘、論達者唯曠）くして隘無し。風は麗則に帰し、辞は稊稗（黄本作美稗。唐写本作稊稗、是。）を剪る。

賦は詩から出て、流派を異にし、事物を描写して文彩欝然絵画彫刻のごとく、物滞るところ無くあらはされ、言弘くして窮りなく、その情麗しくして規範あり、その辞はよく蕪雑を剪裁する。

鎔裁第三十二

范注に云、鎔とは情理を治めて綱領を清晰ならしむる所以。裁とは辞采を治めて蕪穢を生ぜしめむる所以と。即ち趣意をよくとゝのへて正しく体統あらしめ、蕪雑な辞采を削つて浮辞贅語を無くすることである。

凡そ文は思想・内容をよく整理した上で始めてそこに文采が用ひらるべきである。人の性気の剛柔に本づいて文の根本を立て、之を変通させてその時々に応ずる。剛柔よつて文体の本が立つと自ら意向が一方に偏し易く、時に応じて無限に変

化させれば、往々にして文辞が繁雑に陥り易い。こゝに肝要な手段は、専ら鎔裁といふことであり、これによつてかたよつた情理を正し文采を匡すのである。文の体を正すことを鎔といひ、浮辞を剪り截つことを裁といふ。

浮辞を裁てば蕪穢が生ぜず、情理をとほせば綱領が昭かとなる。たとへば繩墨もて明かに材木を分ち、斧斤もて余分を削りとるが如きものである。「駢拇枝指は生れつきの余計なもの、附贅懸肬は身に生える余計なもの」といふ。文意一貫せず、二意両出するは文義の駢枝であり、辞句重複するは文辞の肬贅である。

凡そ思想感情を表現する初め、（心に浮かぶ）辞采が余りに雑多なのに苦しむ。心は権衡でなければ、勢ひ必ず軽重が混じる。されば大文章を起草しようとする時は、先づ三つの標準を立てねばならぬ。第一にはのべようとする事柄を設けてそれに応ずる文体を定め、次に事類を参酌してその正しきをとりあげ、最後にことばをあつめてその肝要なものをとりあげる。さうした上で華（文飾）を舒べ実（内容）を布き、よく取捨して或は文り、或は質にし、繩墨に外れたものは美材といへども遠慮なく削り去る。かくして始めてよく首尾相叶ひ、筋がとほつて順序が乱れぬ。若しこの術が始めから定まらず、只心のまゝに辞を逐ふてゆくならば、本筋にはづれたものがやたらに加はつて、余計なものが必ず多くなるであらう。

故にこの三つの標準が定まつた上で、次に字句を研討する。一句でももし削り得るものがあつたら、それは尚文章の構成が粗雑なる証拠であり、一字も減ずることが出来ぬやうならば、はじめてその文章が緊密であるといへる。精確な論、緊要な語といふものは最も簡略な体であり、遊戯隠微の句といふものは極めて繁瑣な体であるが、この繁といひ略といふも皆人の性の好む所に随ふものである。引き伸ばせば僅か両句も一章となり、つゞめて云へば一章も削つて両句となる。情

思豊かな者はよく敷衍し、才性確実な者はよく削る。よく削る者は字を去つても趣意は留り、よく敷衍する者は辞さま〴〵なれど意は明白である。もし字を削つてそのために意が闕けるならば、それは表現の不足であつて、正確に要を得たものとは云はれず、もし辞を敷衍して言葉が徒らに重なるやうならそれは表現の蕪穢であつて、豊かにたれるものとは云はれぬ。昔謝艾と王済とは西河の文士であつた。張俊がこの二人を批評して、艾の文は繁多であるが、削ることは出来ぬ。済の文は簡略であるが増すことは出来ぬといつた。この二人の如きはまことに鎔裁に工夫をつみ、繁略をよく心得てゐたものと謂ひ得よう。陸士衡の如きに至つては、才は優れてゐるが、その作る文辞は尤も繁多であつた。その弟の士龍は才思に乏しく、その文はいつも簡潔を好んだ。この陸雲(士龍)が兄陸機を論ずるときは、常に兄の文が繁多なるを遺憾としてゐた。而も尚「兄の文には次々に清新なことばが現れてくるので、その繁多なのも病にはならぬ」と云つてゐるが、蓋し兄弟の好を重じたからに違ひない。凡そ美しい錦もて衣を作るにも、長短一定の寸法があり、美しい彩を喜べばとて、その為めに領袖の長さを増すことはせぬ。巧みな作者でも兎角繁に陥り易い。況んや拙き作者に於てをや。而るに陸機の文の賦に「榛梏も剪る勿れ、庸音も曲を足す」(枯木も山のにぎはひ)といつてゐるのは、彼の識見亦鑒る所が無いではないが、而も彼の性情として繁を削るのに苦んだものである。夫れ百の骨節があつまつて人の体をなし、共に一つの生命を守る。万趣の文采を会めて文章のこゝろを離れぬ。もしこゝろを周ねくゆきわたらせて、而も繁ならず、辞を運らせて而も濫でないやうにするには、この鎔裁の術によらずして、何を以てよくしようか。

贊に曰く、

篇章の戸牖、左右に相瞰ふ。辞は川流の如く、溢るれば汎濫す。損益を権衡し、濃淡を斟酌す。繁を芟り穢を剪れば、負

担を弛うせむ。

鎔裁は文章の左右のまど。辞は川流の如く、溢れると氾濫する。増減すべきところをよくはかり、濃淡の程よきを斟酌せよ。よく繁穢を剪裁せば又累を免れるであらう。

声律第三十三

主として単音孤立語の連鎖である中国文章の特色として、ことに声律をとゝのへて、声調の美を重んずるのは自然の勢だといつてよい。古来の名文には自づと声律に叶つたものがあると思はれるが、然し古は特に声律のためにその術を研究することはなかつた。魏の曹植は当時の梵唄に刺戟されて音律の妙を知つたといはれ、晉の陸機は文の賦に「音声のたがひに代るは、五色のたがひに施すがごとし」云々と云ひ、范曄は「生れ乍らにして宮商を別ち、清濁を識るは、これ自然なり。古今の文人を観るに、多くはこゝに全からず。たとひ此を心得たる者あるも、必しも根本中より来らず」といつた。宋末以来始めて音に四声があることが研められ、周顒、沈約、謝朓、王融などの主張にもとずき、特に沈約がその首唱者となつて、詩文に音の抑揚高低を考へ、平上去入の四声で制約し、雙声疊韻を按配して、八病を論じ声律をとゝのへることを説いた。之が永明体の文学と呼ばれるものである。鍾嶸の詩品などには、かくては徒らに拘束多く、真の美を傷けるものと論ぜられるが、兎に角、劉勰の当時は、この声律を以て文学の最も重大な要素とする趨勢であつたことは云ふ迄もない。劉勰は実に沈約によつて認められた人でもあつた。

たゞ著者の意向としては、声律をとゝのへるといふことは決して徒らなる技巧でなく、之こそ自然の音籟であり、どこ

までも言語にあらはれる自然の美だと考へたことは注意すべきである。

音律の始めは人の声にもとづくものである。人の声に宮商角徵羽五声高下の調子があるのは、その声を出す人の血気によるもので、先王は之によつて楽歌を制作した。従つて楽器は人の声を模写したものであり、人の声が楽器を模倣するものではないのである。故に言語は文章(一)の関鍵であり、精神の枢機(かなめ)であるが、その言語の律呂声調といふものは一に脣吻の作用による。

(一) 黄本原文、故言語者文章神明枢機とあり、文章の下二字を脱せるが如く、今范氏によつて関鍵の二字を補ふ。

古は歌を教へるのに、先づ一定の法をもてその資格を揆り、疾呼して宮調にあたり、徐呼して徵調に中らせたといふ。

韓非子外儲説右上、疾呼して宮に中らず、徐呼して徵に中らぬ者は教へることが出来ぬといふ。

商徵の響は高く、宮羽の声は低い。

黄侃云、この二句訛有り。宮商響高、徵羽声下をあるべきものと。上に引く韓子の語によつても黄侃説の妥当なるを思ふ。

声を発するときの喉舌脣歯の作用如何によつて、或は太く或は細く、その声は明らかに分たれる。

原文、抗喉矯舌之差、攢脣激歯之異、廉肉相準、皎然可分とあり。抗喉云々の二句は皆発声の際の口の形。

今人が琴を操つて調子がとゝのはぬときは、必ず絃を張りなほすことを知る。而るに文章をつゞつてその調子が外れてゐても、之を調べることを弁へぬ。彼の絃から出る響はよく諧(ととの)へ得るのに、我が心の声たる言語文章については一向律を調へることが出来ぬといふ、その故如何。まことに内なる声をよく聴くことは難しいからである。故に外なる声をきゝ分け

ることは易く、琴の絃は直ちに手もて正されるが、内なる声をきくことは難しく、心と声とが紛れるのだ。一定の声律の法を以て諧調を求めるのでなければ、徒らに文辞で逐つても諧調を期し難い。

乃で（声律の自づと定まる法といへば）声には飛（平清）沈（仄濁）あり、響に雙声畳韻あり、一句の中、雙声が字を隔てゝ存しては常に調子が舛ひ、畳韻が句中に雑つてゐれば必ず音調がそむく。

㈠　所謂八病の中の傍紐に当る。

（八病の大略をあげれば

平頭。五言詩の第一字は第六字と同声なるを得ず。第二字は第七字と同声なるを得ず。――同声とは四声を同うすること。）

上尾。五言詩の第五字は第十字と同声たり得ず。

蜂腰。五言詩の一句の中、第二字は第五字と同声たるを得ず。

鶴膝。五言詩の第五字は第十五字と同声たるを得ず。

大韻。五言詩の第十五字目に韻をふむに、上の九字の中に同類の韻字を用ふ可からず。

小韻。句末の韻字以外にして互に韻を相犯すもの。

傍紐。五言詩の一句の中に雙声が字を隔てゝあるべからず。

正紐。五言詩の一句の中、一紐の字を犯すべからず。

正紐傍紐の区別。或曰、正紐は同じく雙声なるも一字の紐に従ひ四声を得るもの、（発音同じきも四声を異にするもの。従つて雙声であると共に又畳韻に近く。元・阮・願・月の如し。）

傍紐とは他字の来つて雙声を為すもの、（二字雙声の関係ありて、必しも韻を同うせぬ。結裙のごとし。）

之は一説で、ことに正紐傍紐についてはその説明一様ならず。文鏡秘府論・及三浦梅園の詩轍など参照のこと。

雙声は字を隔てゝ存在することを嫌ふので、参差とか、踟躕とか、二字連続してゐる場合は無論差支へなく、却つて音調の美をなすのである。

㈡　八病の小韻に当る。之亦窈窕とか、徘徊の如く、両字一処にある場合は少しも病とならぬ。

仄濁の声は響発して断絶する如く、平清の音は軽くあがつて遠く消える。すべて声韻は轆轤の如く円転し、声律は逆鱗の如く緻密に相承けてゆく可きもので、もしその連続接合が緊密でなかつたならば、声調は行き悩んで、その病を為すこと、文章家の吃りといふ可きであらう。

そも〳〵この文章が吃りとなる患は、人が詭を好むところから生ずる。新異を追ひかける為めに喉脣がみだれて律を失ふのだ。もしその結滞を解かうとするなら（一言に拘はれず、一句を恋はず、声調を妨げるものを）思ひ切つて断ち去ることだ。声韻に礙滞するものを、左右前後に尋ね求めてゆくならば、声は脣吻に円転として、玲々玉を振ふが如く、辞は耳になびいて纍々珠を貫くが如くにならう。

されば文の美醜は寄せて吟詠に在り、吟詠の滋味は字句に流露し、字句の気力は和韻に極まる。

(一) 黄本もと吟詠滋味、流於字句、気力窮於和韻、の字を下に作る。文鏡秘府論にはこゝを引いて「滋味流於下句、風力窮於和韻」とあり。

異音相従ふを和といひ、同声相応ずるを韻といふ。

異音相従とは句内の雙声疊韻平仄がよく和調すること。同声相応とは句末に用ふる韻が前後相ふむことか。

韻は一度び択んで定めれば、あとの韻はつゞけてゆき易い。

同韻の字を選んで用ひてゆけばよいから。

が和の体は抑揚互に諧和させてゆくのであるから、あとに続く響を合せてゆくことは仲々難しい。

一句の中にも平仄声調を考へ、上下の句や又隔句にも調和を求めてゆくのだから容易でない。

だから筆（無韻の文章）は巧みに作り易いやうでも、その声調に諧和を求めて字を選ぶことが至つて難しく、文（有韻の

もの）を綴るのは精緻なり難しとはいへ、その実、韻をふんでゆくことは甚だ易い。声律のこまかい所はいろ〳〵と変化尽きず、一々詳細には言ひ難いが、然もその大綱をあげてみれば、以上の論以外には出ぬであらう。

さてまたその人の音声がよく高低律に叶つてゐれば、たとへば篇を吹く如く、それに反して強いて己れの生れつきの声音を改めて和韻を求めてゆくものは、恰も瑟を調べるのに似てゐる。瑟は柱を移して調子を合はすので、時に調子に外づれる。篇はもとより律の定つた管があるから、どんな場合にも声調のはづれることがない。曹植・潘岳はいはゞ篇を吹く調子、陸機、左思はいはゞ瑟の柱をうつして和を求めるたぐひである。概して之を以て類推して行くことが出来よう。

陸機は呉の人、左思は齊の人、その音は方言をまじへて雅正ならず。往々その音を変へて和韻を求めた。

又詩経の詩人の韻はおほむね清純該切であるが、楚辞は楚の地方のことばなので、正しからぬ韻が非常に多い。張華が韻を論じたとき、陸機の辞は楚音が多いといひ、陸の文賦にも亦自ら楚音とは知りつゝ改めぬと謂つてゐる。之屈原の遺響を受けて、雅正の音を失つたものと謂つてよからう。凡そ該切な韻のはこびはその勢ひ円きを転ばすごとく、なまれる音によつて作られたものは鑿柄齟齬が甚しい。この齟齬鑿柄の患から免れることが出来たら、先づ大過なきものだ。練達の才、洞徹の鑒ある人は、一字一音に工夫を凝らし、識疎く才おろかな者は、行き当りばつたりの音にまかせて意を用ひぬ。恰も吹の風の孔竅をすぎてたゞ偶然の音を出し、音を知らぬ南郭子が徒らに竽を吹くが如きにすぎぬ。古の佩玉は、左の音は宮に中り、右のさやぎは徵に中り、その音律を以て歩調を節し、その音が序を失せずといふ。音を以て文を律することをどうして忘れてよからうか。

贊に曰く

情を標しては遠きを務め、音を比しては近きに則る。律を胸臆に吹き、鐘を脣吻に調ふ。声監梅を得れば響楡槿を滑にす。支離を割棄すれば、宮商隠れ難し。

情はつとめて遠きをめざし、音はつとめて密接につらねる。声律は胸臆に生じ、音調は脣吻にとゝのへる。声調和を得てはその響楡槿の羹を滑かにするが如し、支離蕪雑を割棄せば、音律自ら顕かであらう。

礼記内則に堇荁等の羹を、米粉を加へて滑かにすることあり。

声律といふも胸中から出る自然の調子で、以て喉舌脣吻による音の清濁平仄をとゝのへる。たゞそれにはその人の音が雅正でなければならぬ。古来中国の方言の多種雑多なことは、四声を論じても一様でなく、そこに声律を論ずる場合の悩みがあることに触れてゐるのは当然である。

附　沈約の宋書謝霊運伝の論の一節

夫れ五色相宜べ八音協暢するは、玄黄律呂各々物の宜しきに適ふに由る。宮羽を相変じ、低昂舛に節せんと欲せば、若し前に浮声有らば後には切響を須ひ、一簡の内、音韻尽く殊なり、両句の中、軽重悉く異る。此旨に妙達して始めて文を言ふべし。

章句第三十四

凡そ文の趣意を構成するにも、之を現す言葉を布置するにも、皆その場所があり位置がある。趣意を順序立てゝ、その場所に宅いてゆくのを章といひ、言葉をその位置々々に位させるのを句といふ。故に章とは明（趣意を明にしてゆくこと）

であり句とは局（区限）の意である。言を局するとは、字を聯ねて、一句一句と疆界を立てることであり、趣意を明にするとは、のべんとする内容を包括してゆくことである。区限境界が分れつゝ、而もそこに四通の路がかよつてゐるのである。

凡そ人が文章を作るのに、字によつて句を生じ、句を積んで章を成し、章を積んで篇を成す。一篇の文章がかゞやくのは、その各章に疵なきが故であり、一章の明美なるは、その句に玷なきが故であり、一句の清英なるはその字の妄ならざるが故である。

本を振ふて末之に従ひ、一を知つて万を尽くすといふものである。

文字を練ることが句を清英にする本であり、句を清英にすることが章を明美にする本であり、章を明美にすることが全篇をかゞやかす本である。

凡そ文筆の製作に関しては、篇に大小有り、之に随つて章句を離合し、調に緩急あり、時に随ひ変に応じ、そこに一定の標準は無い。句は数個の字を率ゐて、一句一句と相承けて始めて句としての用を為し、章は一つ一つの内容を総べて行つて、全体の意が言ひつくされるのを待つて各その一章としての体裁をなすものである。その思想感情を引つぱつて、その場その場に次々に応じてゆくこと、譬へば舞の容の廻り環れど、而も舞者それぞれの位置あり、歌の声は細かになびいて、而も自ら上げ下げの節があるやうなものだ。

文辞はさま〳〵に変ずるが、句は句、章は章として段落をなしつゝ、全体の構成をなすこと。

詩経三百篇の詩人の比興を見ると、一章々々をとつてもその意味はとれるが、而も一篇の中の章句として見ると、繭から生

絲を引き出すやうに始終聯絡して、その体は少しの隙間もなく続いてゐる。始めの辞はあらかじめ篇中の意を萌芽してをり、結末の言は前句の旨を追つて補つてゐる。だからこそ外なる文采は美しく交錯し、内なる趣旨はよく一貫してをり、互に相うけ、首尾一体となり得るのである。

もし文辞がその朋を失つて孤立すると、旅にあつて友なきが如くなり、叙事がその次第を失ふと、飄泊の寓の如く落付かぬ。されば句をもとめるにも章を立てるにも、順序の顚倒を忌む。これ固より文の情趣の帰する所であり、有韻の文も無韻の筆も、その点に於ては一致する。ところで無韻の散文に於ては、句数は不定であるが一句の字数には自ら定まれるものあり、四字の句は言葉がつまつてゐるが急ではなく、六字の句は長い[一]とはいへ尙緩にすぎるほどではない。或は三言、五言の句を以て之を変化させてゆくといふこと、之は蓋し臨機の手段である。

(一) 原文六字格而非緩。格は木の枝の長い貌。四言は短いがそれほど急ではない。三言以下となると促急にすぎる。六言は寛長だが、尙緩にすぎることはない。七言以上は緩にすぎる。四字・六字の句が主で、之を時々変化させるのが当時の文章の常法。

詩経の詩頌は大体四言を以て正格とするが、唯祈父[一]・肇禋[二]の詩は二言を以て句をなしてゐる。

(一) 小雅の詩。「祈父。予王之爪牙。」

(二) 周頌。「肇禋。迄用有成。維周之禎。」

二言の始めを尋ねれば、黄帝の世に始まるので、かの竹弾[一]の謡が是である。三言の詩は舜の世に興る。元首良哉[二]の詩が是である。四言は夏の世に広まつた。洛汭[三]の歌がこれ。五言は周代にあらはれ、行露[四]の章がこれ。六言七言は離騒に雑出してゐるが、この二体[五]の詩が成立したのは両漢の世である。かくの如く詩の形のあり方は、次第に推移し、時世につれて代る〳〵用ひられた。

(一) 竹彈の謠。呉越春秋に見ゆ。歌曰「断竹。続竹。飛土。逐肉。」
(二) 虞書に見ゆ。歌曰。「股肱喜哉。元首起哉。百工熙哉。云々」。この哉は語助であり、喜・起・熙が韻をふむので三言の詩と見る。
(三) 夏書五子の歌。
(四) 詩召南。
(五) 黄本原文体の上一字を闕く。范氏の説によつて二の字を補ふ。
五言の句が詩経にあらはれてゐるとはいへ、まだ五言で以て全篇が出来てゐる訳ではない。五言詩の成立は無論漢代である。六言七言の詩亦然り。

さてまた文中幾度も韻を改めて調子をととのへてゆくのは、それによつて辞気をかざり、又は節するものである。賈誼・枚乗は二韻づゝでやゝもすれば韻をとり換へる。それに反して劉歆や桓譚は百句の長きにも途中でその韻を換へぬ。之亦各その志向があるのである。

昔魏の武帝は賦を論じて、同一韻を積み重ねることを嫌ひ、韻を換へることを好んだ。陸雲も亦四言は四句で一転するのを佳とした。彼の韻のふみ方をみると、その態度は枚乗や賈誼と同じである。然し乍ら二韻で早くも易へるのは、声調がやゝ落付きなく、百句の長きにも韻を換へぬのは口が疲れて了ふ。非常の才人は思ひ切つた方法を振ひ、思ひのまゝによろしきを得もしようが、むしろ之を折中して、あやまちなき方がよいと思ふ。

又詩経の詩に於ては、兮の字を以て一句の字数の中に入れてゐるが、楚辞では之を句外の字として用ひてゐる。思ふに兮の字を以て句を成してゐるのは、実は語助の余声（ひつぱるこえ）であり、舜が南風(一)を詠じてこの方、久しく用ひられてゐる。而るに魏の武帝が之を好まなかつたといふが、思ふにかゝる語助は文義に益なしといふわけではなからうか。

(一) 南風之薰兮。可以解吾民之慍兮。南風之時兮。可以阜吾民之財兮。之もむろん仮託である。

夫とか、惟・蓋・故とかは文の発端の言ひ出し。之・而・於・以は句の間に挿入する常の形。乎・哉・矣・也は亦句末に用ふる常例である。事の内容から言へばさしたる要もないやうだが、その効用は実に大切なもので、巧みなものはよくこれを運らして文体を密にとりつくろひ、数句の外にかゝる一字の助けを得させるやうにする。かうした句外の字も仲々謬ることの出来ぬものだ、まして肝心の章句に於てをや。

贊に曰く

断章検有り。積句恒あらず。理配主に資し、辞失朋を忌む。情を環らし調を節し、宛転として相騰ぐ。同を離し、異を合し、以てその能を尽さん。

いかなる断章も検べて見ればその詩全体につながるもの、而も句を積みゆくことには変化恒なし、理はよく趣意に叶ふをとり、辞はその孤立するを忌む。情をめぐらし調を節し、宛転として相騰る。同異を離合せしめて、以てその能をつくせ。

以上章句の関係から、句の字数、換韻の法、虚字の用をのべた。言ふ迄もなく当時の文章は、四字六字の駢体文が主なものであつたことを理解してよまねばならぬ。

麗辞第三十五

文辞の対偶について。麗とは説文に旅行也。ともに行くの意。古文朋に作る。両々相ならぶ形。麗辞とは所謂駢儷体の文辞である。（駢とは二馬並ぶこと。儷も並、偶の意。）

自然が人の身体を賦与するにも、手足は必ず二つづゝある。人の精神のはたらきにも、ものごとは決して孤立せぬ。凡そ心に文辞を生じ、万端の思想を表現してゆくにも、高下相俟つて自然に対をなすものである。

先づ文辞の偶儷が人為にあらず自然に出ること。

堯舜の古、言辞は未だ文采をつくすに至つてゐないが、而も皐陶が贊（大禹謨）には、「罪の疑しきには惟れ軽くし、功の疑はしきには惟れ重くす」と云ひ、益が謨（はかりごと）を陳べたことばにも（同上）「満は損を招き、謙は益を受く」といふ。之らは決してことさら意を用ひて儷辞を設けたのではなく、ゆくりなく自然の対句を成したのである。

易の文言伝や繫辞伝は孔子の神妙なる思想をのべたものである。その乾(一)の四徳、元亨利貞をのべたところは、前句が後句をはらみ、後句が前句を受け、九五(二)の龍虎その類に従ふをのべては、字々相対し、乾坤(三)易簡の理をのべては句々宛転相承け、日月往来の段は行を隔てゝ相応ずる。句字の用法は同じでないが、その対偶にするといふ意は同じである。

(一)「元者善之長也。亨者嘉之会也。利者義之和也。貞者事之幹也。君子体仁足以長人。嘉会足以合礼。利物足以和義。貞固足以幹事。君子行此四德者。故曰乾元亨利貞。」（文言）

(二)「子曰。同声相応。同気相求。水流湿。火就燥。雲従龍。風従虎。聖人作而万物覩。本乎天者親上。本乎地者親下。則各従其類也。」（文言）

(三) この繫辞の文章を特に行を改めつゝ書くと、

天尊地卑。乾坤定矣。卑高以陳。貴賤位矣。動静有常。剛柔断矣。
方以類聚。物以群分。吉凶生矣。
在天成象。在地成形。変化見矣。
是故。剛柔相摩。八卦相盪。
鼓之以雷霆。潤之以風雨。

日月運行。一寒一暑。
乾道成男。乾道成女。
乾知大始。坤作成物。
乾以易知。坤以簡能。
易則易知。簡則易從。
易知則有親。易從則有功。
有親則可久。有功則可大。
可久則賢人之德。可大則賢人之業。
易簡而天下之理得矣。天下之理得而成位乎其中矣。（繫辞）

(四) 日往則月来。月往則日来。日月相推而明生焉。
寒往則暑来。暑往則寒来。寒暑相推而歳成也。
往者屈也。来者信也。屈信相感而利生焉。（同上）

詩経にも対句があり、左伝や国語に見える列国大夫の応対の辞にも亦対偶を用ひてゐるが、それらは、或時は対偶を用ひ、或時は用ゐず、その場に応じて変化させてゐるので、殊更に対偶に意を用ひてゐるのではない。両漢の文人、揚雄・司馬相如・張衡・蔡邕らが偶麗の辞を尊重してから、かの宋人の画、(一)呉人の冶の如く、彫琢の巧を極め、駢麗の句は濃き彩を以て行はれ、対偶の意は高き韻を以て発揮された。

(一) 荘子田子方篇に見える画人の話。
(二) 呉越春秋。干将が五山の鉄精を采つて剣を作る話。

漢に至つて偶麗の技巧を尚び、文彩かゞやくところ儷句あり、儷句あるところ文彩厚く、発想に対偶の法を重ねて、そのひゞきを遠く馳せたのである。

魏晋の才人たちに至つては、字句を或は析ち或は聯ね、いよ〳〵緻密な技巧を用ひて微に入り細を穿つた。然もそのよく

機微に合つたものは巧妙なるを得たが、いたずらに浮仮なるものは労して効果は無かつたのである。

さて乃で麗辞の体に四つの対法がある。

言対はたやすく、事対はむつかしい。

反対は優り、正対は劣る。

言対とはたゞ空なる辞を対するもの。

事対とは故事を並べて対するもの。

反対とはすぢみちは逆だが、趣きは一致するもの。

正対とは事柄は違ふが意義の全く同じきもの。

司馬相如上林の賦の「修容乎礼園」。翺翔乎書圃」は言対の類。

宋玉神女の賦の「毛嬙鄣袂不足程式」。西施掩面比之無色」は事対の類。

王粲登楼の賦の「鍾儀幽而楚奏。莊舄顕而越吟」は反対の類。

孟陽の七哀の「漢祖想枌榆」。光武思百水」は正対の類である。

凡そ言対といふのは、たゞ胸にわく言葉を対にしてゆけばよいので作り易く、事対は学問を必要とするのでむつかしい。

反対は幽と顕の如く逆な立場を言つて而もその趣旨を一にさせるから優ぐれてをり、正対はたゞ同じ意味の相似たことを並べるのだから劣れりとする。

又言対事対の中にそれ〴〵正対反対があるので、かやうにして類推してゆけばあらゆる対句の取り方が明かにならう。

(一) 黄本原文「……並貴共心。正対所以為劣也。又以事対。各有反正。指類而求。万条自昭然矣」とあり。紀昀評に之は「並肩共心……又言対事対。各有反正。指類而求万。条目昭然」となるべきものとする。かうすると范氏も云ふごとく万の字は衍文か。

張華の詩に「遊雁比レ翼翔。帰鴻知レ接レ翮」(翮もはね)とあり、劉琨の詩に「宣尼悲二獲麟一。西狩泣二孔邱一」。(宣尼孔丘何れも孔子のこと)とあるが、このやうに全く同じことを重ねて云ふのは、対句に於ける駢拇枝指である。乃で言対の美しいのはその対法の精巧さにあり、事対に大切なのは二つの事柄がつとめてよく相当ることに在る。若し二つの事を並べて、その優劣が均しからぬときは、恰も駿馬を左に驂け、駑馬を右に服けるやうなものだ。若し事が孤立して、相偶するものがないならば、これは一本足の夔(という獣)がびっこを引いて行くやうなものだ。又もし文の気韻も文采も平々凡々で、たゞ祿々として対句を並べて行ったなら、徒らに睡気を催すばかりである。必ずや事理缺くるところなく、その章を並べかがやかし、奇偶たがひに用ひて、時に散語(対句でないもの)を以て調節して行ったなら、それでこそはじめて貴いのである。之を推して考へてゆけば、道理は自ら明かにならう。贊に曰く。

体植つこと必ず両。辞動けば配有り。左に提げ右に挈へ、精味兼ね載す。炳燦華を聯ね、鏡静かにして態を含む。玉の潤ひの雙び流るゝこと、彼の珩珮の如くせん。

肢体必ず両々相対するごとく、一たび言葉が出れば自ら対句が生れる。左右並べ率ゐて、妙味を併せ載せる。かくてかどやく華を並べて静かな鏡の面にうつす。潤へる玉のごときことばが行を並べて垂れること、かの珩珮(二すぢに垂れる佩玉)にもたとへられよう。

対句にも色々の例あり、こゝに之を四対に分つた。而もその偶麗たるや、造化が人の形を与へるのに肢体必ず相対する

ごとく、人の心に発する文辞にも亦自ら偶麗を成すので、強いて一方にとらはれて、或は偶をのみ固執し、或は奇をのみ用ひやうとするのは謬である。奇も偶もその自然のよろしきを得てこそ美しい。後人が徒らに対偶をのみ喜び、その内容を空にしてたゞ麗辞を弄ぶに至つて、文章は生気を失ひ、遂に唐代後半に至つて、韓愈らの古文復興の運動が起り、所謂文は八代の衰を起すと称された。然し何といつても麗辞は中国文章の特色であり、引いては中国人の思考の形式にも関係して考へられる。韓愈自らの文章も、辞に駢麗を弄ばぬとはいへ、文意構成に於て、やはり偶意を用ひ、所謂相関の法を以て舒述してゐるものが多いのである。